

嬭恋村におけるキャベツ畑のカモシカによる農業被害

麻布大学 野生動物学研究室

原 渚・南 正人

—背景・目的—

群馬県の西北部に位置する嬭恋村は夏秋キャベツの一大産地である。近年、野生動物による農作物被害が深刻化しており、野生動物による被害額が群馬県の中で最も大きい地域である。これらの被害の大半は国の特別天然記念物であるニホンカモシカ (*Capricornis crispus* 以下、カモシカと表記) によるものと言われている

嬭恋村では 15 年ほど前からカモシカによる農作物被害が増えてきており、平成 19 年から 5 年間で 70 頭のカモシカの個体数調整が行われた (嬭恋村 2011)。カモシカによるキャベツの採食の目撃も多く、カモシカが加害していることは間違いないが、主要な加害動物がカモシカだけであるかは不明である。また、被害がどのような原因で起きているかもあきらかではない。カモシカは遺伝的多様性が低いことから、個体数調整は避けるべきだといわれている (出口 2000)。また、キャベツ畑の防風林にはニホンジカ (*Cervus nippon* 以下、シカと表記) の痕跡が多く残っており、カモシカの食害報告はシカではないかという聞き取り調査の結果も長野県では報告されている (中部森林管理局 2012)。本研究ではキャベツに被害を与える動物種を特定し、被害発生の原因を考察することを目的とした。

—方法—

(1) センサーカメラによる畑周辺の生息動物調査

畑の周辺にいた動物種と畑に侵入した動物種を特定するために、2011 年と 2012 年に 6 カ所で、それぞれ畑と林に隣接する林にセンサーカメラを設置した。

(2) 農業被害調査アンケート

平成 22 年、23 年度に行われた嬭恋農作物被害調査の結果をもとに、嬭恋村の農家がどんな動物に被害を受けていると認識しているかを調べた。

—結果・考察—

合計で、畑でカモシカが 74 回、シカが 18 回、イノシシが 24 回、林でカモシカが 105 回、シカが 154 回、イノシシが 73 回撮影された。

3 カ所の畑でカモシカが収穫後の放棄キャベツを食べている姿が撮影され、その内 2 カ所では放棄作物がある期間に撮影が集中した。電気柵が撤去された収穫後の畑のキャベツにカモシカが誘引されていると考えられた。親子連れ、3 頭連れで畑に出ている姿から、親から子へ、つがいの一方からもう一方へ、キャベツ畑の利用の習慣が広まっている可能性がある。

畑と林の両方でカモシカが撮影された場所と、林だけでカモシカが撮影された場所があった。カメラの設置場所が適当でなかった可能性の他に、そこに定住しているカモシカがキャベツを食べない個体だった可能性もある。

シカがキャベツを食べている様子も撮影された。農業被害調査アンケートの結果は、平

成 22 年度も 23 年度も、シカによる被害を認識している農家は全体の 1 % にも満たなかった。シカが撮影された時間帯は夜間がほとんどであったことから、農家による目撃が少なかったのだろう。農家の認識と実態は大きく違う可能性がある。

今後は、電気柵の設置とともに、放棄作物の早期の除去によりカモシカやシカを畑に誘引しないことが被害を軽減させる上で重要であると思われる。シカやイノシシの被害も含めて、被害発生メカニズムをさらに調べる必要がある。それが、特別天然記念物のカモシカを保護しながら、キャベツの被害を軽減することに繋がるだろう。